

ポルトガル語の「硬口蓋子音」と「母音音素の対立中和もしくは揺らぎ」

As consoantes palatais e a «neutralização da oposição» ou «flutuação» de alguns fonemas vocálicos em Português

牧野真也

Shin'ya MAKINO

§1. はじめに

ポルトガルの大学都市コインブラ Coimbra で話されているポルトガル語の標準の変種では、¹ 強勢音節で母音音素として一般的に /i e e v a o u/ が対立する。対立は、調音的には舌の最高点の高低差および前後差による音質的なものであり（円唇性の有無は余剰特徴と考えられる）、いわゆる「二重母音」を「長母音音素の実現」として解釈しなければ、音長による対立は認められない。これらの対立は大部分の音環境において安定しているが、BARBOSA, MARÇALO, BARROSO によると、² いわゆる「硬口蓋子音」の /ʃ ʒ ʎ j/ の前では対立 /e/-/ɛ/-/v/ が中和し、³ さらに同コンテキストでは /j/ が弁別能力を失って対立 /e/-/ɛj/ も中和する。

確かに *fecho* 「留め金」などの形態は、先行研究の見解を裏づけるように、話者によって、もしくは同じ 1 人の話者でもその時々によって ['feʃu] ~ ['feʃu] ~ ['feʃu] ~ ['feʃju] のような変異を示す。だが、その一方で *mexa* ['mɛʃɐ] 「私/彼はさわる（接続法現在）」や *mexe* ['mɛʃi] 「彼はさわる（直説法現在）」、*peixe* ['peʃi] 「魚」のように [e e v ej] のどれか 1 つしか持たないと思われるような形態も観察されるのである。そこで筆者が後者のタイプの諸形態を取り上げ、コインブラ変種では慣用的ではないと思われる形態（たとえば *peixe* ['peʃi] の [ej] を [ɛ] と入れ換えた *['peʃi] など）を意図的に用いて母語話者と会話を行うと、コミュニケーションが成立しない場合が生じた。有声の相関対 /ʒ/ の前でも状況は同じであった。

このことから「[e e v ej] は /ʒ/ の前でも弁別的に対立しているが、他の音コンテキストとは違って、語彙項目へのそれらの配分に話者間での差異、もしくは同一話者内における揺らぎ *flutuação* が認められるのではないか？」との疑念が浮かび上がってきた。⁴ 以下ではこの可能性を確かめるために現地ポルトガルで行った調査と聞き取り弁別テストを報告し、そこから得られた知見を述べることにする。ただし、紙数の関係上、同様の結果が得られた /ʒ/ の前の強勢音節に関しては、以下、詳細な報告を省略することにする。

§2-1. 予備調査とその手順・結果

まずはじめに、/j/ の前で強勢母音 [e e v ej] が語彙項目に対してどのように配分されているかを調べる目的で調査を行った。手順は、まず語形の音声表記が行われている 3 つの辞書 — FONSECA (1957), LAROUSSE (1996), ACADEMIA DAS CIÊNCIAS DE LISBOA (2001) — を参照し、LAROUSSE (1996) で見出語として取り上げられている 35000 語あまりの中から、/j/ の前で強勢母音 [e e v ej] のどれかを示す形態を動詞の活用形をも含めてすべて取り出した。さらに、語源と史的音変化をもとにそれらの形態をグループ分けし、それぞれの中から調査の対象とすべき語形を選んだ。⁵

次に、均質なデータを得るためにコインブラ生まれで同地育ちのインフォーマントを選定した。内訳は

20歳前半3名 (S1, N, A1), 20歳代後半3名 (F1, C, S2), 30歳前半1名 (A2), 30歳代後半1名 (F2), 40歳前半1名 (A3) の計9名で、すべてコインブラ大学の在校生もしくは卒業生である。⁶ そして、これらのインフォーマントに対して、「消しゴムは1個、鉛筆は1本、では本はどう数えますか?」と尋ねて「1冊」と答えてもらったり、あるいは「夏といえば枝豆と…」と言いかけて「ビール」と補ってもらったりする類の穴埋め形式の質問を口頭で行い、そのやり取りをデジタル録音した。

調査対象とした語形とインフォーマントによる問題の箇所の声的実現は次の表1にまとめてある。語形は語源ごとにグループ化して枠で囲っており、それぞれの枠の中では「左欄」が「調査対象の語形」、「右欄」が「問題の箇所の声的実現」である。

lat. *-isce-* (+V)

表 1⁷

<i>mexo, mexas, mexa, mexam</i> (← <i>mexer</i> 「さわる」 < <i>mexer</i> < lat. <i>mīscēre</i>)	[e] (9名全員)
<i>mexes, mexe, mexem</i>	[ɛ] (9名全員)
<i>peixe</i> (< lat. <i>pīsce-</i>) 「魚」	[ɛj] (9名全員)

lat. *-istūl-* + V もしくは *-ēstūl-* + V

<i>fecho</i> (< lat. <i>fistūla-</i> もしくは lat. <i>pēstūlu-</i>) 「留め金・ファスナー」	[ɐ] (S1)
	[ɛj] (その他8名)
<i>fecho, fechas, fecha, fecham, feche, feches, fechem</i> (← <i>fechar</i> 「閉める」 ~ <i>fecho</i>)	[e] (F2)
	[ɐ] (S1)
	[e]~[ɛj] (N)
	[ɛ]~[ɛj] (S2)
	[ɛj] (その他5名)

lat. *-ax-* + V

<i>deixo, deixas, deixa, deixam, deixo, deixes, deixem</i> (← <i>deixar</i> 「残す」 < lat. <i>laxāre</i>)	[ɛj] (9名全員)
<i>eixo</i> (< * <i>āxu-</i> ~ lat. <i>āxe-</i>) 「軸」	[ɛj] (9名全員)

lat. *-asce-* (+V)

<i>feixe</i> (< lat. <i>fāsce-</i>) 「束」	[ɛj] (9名全員)
<i>ameixa</i> (< * <i>damascēna-</i> ~ lat. (<i>prīna-</i>) <i>damascēna-</i>) 「スモモ」	[ɛj] (9名全員)

lat. *-apsē-* + V, *-assī-* + V

<i>queixo</i> (< * <i>cāpsēu-</i> ~ lat. <i>cāpsa-</i>) 「顎」	[ɛj] (9名全員)
<i>queixo-me, queixas-te, queixa-se, queixam-se</i> (← <i>queixar-se</i> 「不平・不満を言う」)	[ɛj] (9名全員)
<i>queixe-me/-se, queixes-te, queixem-se</i> (< * <i>quassāre</i> ~ lat. <i>quassāre</i>)	

借用語

<i>flecha, frecha</i> (□ fc. <i>flèche</i>) 「矢・弓矢」	[ɐj] (A1) [e] (その他 8 名)
<i>mecha</i> (□ fc. <i>mèche</i>) 「(髪の) メッシュ」	[ɐ] (9 名全員)
<i>trecho</i> (□ cast. <i>trecho</i>) 「(作品の) 抜粋・一節」	[e] (F2) [ɐ] (S1) [ɐj] (その他 7 名)
<i>desço, desça, desças, desçam</i> (← <i>descer</i> ⁸ 「降りる」 ~ <i>descender</i> □ lat. <i>descendēre</i>)	[e] (9 名全員)
<i>desces, desce, descem</i>	[ɐ] (9 名全員)
<i>vexo, vexas, vexa, vexam, vexe, vexes, vexem</i> (← <i>vexar</i> ⁹ 「辱める」 □ lat. <i>uexāre</i>)	[ɐ] (9 名全員)

§ 2-2. 調査結果からの結論

上の表 1 から明らかなように、調査対象となった語形は「問題の位置に [e e ɐ ɐ j] のどれか一つしか持たない形態」と「話者によって、もしくは、同一話者でもその時々によって [e]-[ɐj] などの変異を示す形態」とに分かれた。この表 1 の枠内でそうした [e e ɐ ɐ j] の語彙的配分を検討すると、それは語源形や、動詞活用における母音交替などの形態論的事実を反映していると思われる。つまり、問題の位置に [e e ɐ ɐ j] を示す形態では、それらが無差別に用いられているわけではなく、それゆえ [e e ɐ ɐ j] の分布状況からはそれらが同一音素の自由異音の関係にあることは確認できないことになろう。

§ 3. 聞き取りテスト

上で見たように [e e ɐ ɐ j] の分布からは対立 /e/-/ɐ/-/e/-/ɐj/ の中和の有無を判断しがたいので、次のような母語話者に対する聞き取りテストによって問題の解決を試みることにした。

§ 3-1. 聞き取りテストの対象となる音形

弁別的性格の有無が問題となる音声的対立は /j/ の前の強勢音節における [e]-[ɐ], [e]-[ɐ], [e]-[ɐj], [ɐ]-[ɐ], [ɐ]-[ɐj], [ɐ]-[ɐj] である。これらの対立には対応する最小対が存在しないものがあるので、最小対の存在のみを音韻論的対立の証拠として用いることはできない。そこで、実在する音形 (たとえば *mexe* ['mɛʃi]) においてその強勢母音を他の強勢母音に置き換えた音形 (*['mɛʃi], *['mɛʃi], *['mɛʃi]) をも用いて聞き取り認識テストを行うことにした。刺激として用いることにした音形は次のとおりである (表 2)。

表 2

[e]	[ɛ]	[ɐ]	[ej]
[ˈmɛʃɐ] (<i>mexa</i>)	[ˈmɛʃɐ] (<i>mecha</i>)	*[ˈmɛʃɐ]	*[ˈmɛʃɐ]
*[ˈmɛʃi]	[ˈmɛʃi] (<i>mexe</i>)	*[ˈmɛʃi]	*[ˈmɛʃi]
*[ˈdɛʃi]	[ˈdɛʃi] (<i>desce</i>)	*[ˈdɛʃi]	[ˈdɛʃi] (<i>deixe</i>)
*[ˈpɛʃi]	*[ˈpɛʃi]	*[ˈpɛʃi]	[ˈpɛʃi] (<i>peixe</i>)
[ˈfɛʃi] (<i>feche</i>)	[ˈfɛʃi] (<i>feche</i>)	[ˈfɛʃi] (<i>feche</i>)	[ˈfɛʃi] (<i>feche / feixe</i>)

() 内は音形に対応する正書法で, *が付されたのは「§2の予備調査では確認されなかった形」¹⁰である。

以上の20音形を刺激として選んだ理由は次の(1)~(6)のとおりである。

(1) [e]-[ɛ]については, 最小対 *mexa* [ˈmɛʃɐ] - *mecha* [ˈmɛʃɐ] が存在するのでこれを刺激として用いることができる。また, それを補完するものとして, 問題の位置に [ɛ] のみを示す他の語において [e] を [ɛ] に置き換えた形 (*mexe* [ˈmɛʃi] → *[ˈmɛʃi] や *desce* [ˈdɛʃi] → *[ˈdɛʃi] など) を聞き手がどのように認知するかを調べるとよいと思われる。

(2) [e]-[ɐ]については, 最小対が存在せず, かつ, 問題の位置に [ɐ] のみを示す語も存在しない。したがって, /ʃ/ の前の強勢音節に [e] のみを示す語においてその [e] を [ɐ] に置き換えた形 (*mexa* [ˈmɛʃɐ] → *[ˈmɛʃɐ] など) を聞き手がどのように認知するかを調べる必要がある。

(3) [e]-[ej]については, 最小対として *feche* [ˈfɛʃi] - *feixe* [ˈfɛʃi] が挙げられるが, *feche* は他方で [ˈfɛʃi] と実現されることもある。ゆえにコインブラ変種において *feche* に固有の実現形の1つと考えられる [ˈfɛʃi] が *feixe* として認識されえないかどうかを調べることににより, その対立が音韻的なものであるかどうかを判定しなければならない。さらにその結果を補完するために, [e] のみを示す語において [e] を [ej] に置き換えた形 (*mexa* [ˈmɛʃɐ] → *[ˈmɛʃɐ] など) と, [ej] のみを示す語において [ej] を [e] に置き換えた形 (*deixe* [ˈdɛʃi] → *[ˈdɛʃi] や *peixe* [ˈpɛʃi] → *[ˈpɛʃi] など) を聞き手がどのように認知するかを調べる必要がある。

(4) [ɛ]-[ɐ]については, 最小対が存在せず, かつ, 問題の位置に [ɐ] のみを示す語が存在しない。したがって, /ʃ/ の前の強勢音節に [ɛ] しか示さない語において [e] を [ɐ] に置き換えた形 (*mexe* [ˈmɛʃi] → *[ˈmɛʃi] や *desce* [ˈdɛʃi] → *[ˈdɛʃi], *mecha* [ˈmɛʃɐ] → *[ˈmɛʃɐ] など) を聞き手がどう認知するかを調べる必要がある。

(5) [ɛ]-[ej]については, 最小対 *desce* [ˈdɛʃi] - *deixe* [ˈdɛʃi] と *feche* [ˈfɛʃi] - *feixe* [ˈfɛʃi] が存在するのでこれら

を刺激として用いることができる。ただし *feche* は [ʃeʃi] と実現されることもあるので、コインブラ変種において *feche* に固有の実現形の 1 つと考えられる [ʃeʃi] が *feixe* として認識されえないか否かを調べることにより、その対立が音韻的であるかどうかを確かめる必要がある。また、これ以外にも、/ʃ/ の前の強勢音節に [e] のみを示す語において [e] を [ej] に置き換えた形 (*mexe* [ˈmɛʃi] → *[ˈmɛʃi] や *mecha* [ˈmɛʃe] → *[ˈmɛʃe] など) や、/ʃ/ の前の強勢音節に [ej] のみを示す語において [ej] を [e] に置き換えた形 (*peixe* [ˈpeʃi] → *[ˈpeʃi] など) を聞き手がどのように認知するかを調べると、より強固な確認が可能と思われる。

(6) [e]-[ej] については、最小対として *feche* [ʃeʃi] - *feixe* [ʃeʃi] が挙げられるが、*feche* は他方で [ʃeʃi] で実現されることもある。したがって、コインブラ変種において *feche* に固有の実現形の 1 つと考えられる [ʃeʃi] が *feixe* として認識されえないかどうかを調べることによって、その対立が音韻的なものであるかどうか判断しなければならない。さらに、その結果を補完するために、[ej] のみを示す語において [ej] を [e] に置き換えた形 (*peixe* [ˈpeʃi] → *[ˈpeʃi] や *deixe* [ˈdeʃi] → *[ˈdeʃi] など) を聞き手がどのように認知するかを調べるとよい ([e] のみを示す語は存在しないので逆の実験は不可能である)。

§ 3-2. 聞き取り用資料の作成

「聞き取りテストの対象となる音形」を「正書法に手を加えた形で表記したもの」(例えば *[ˈpeʃi] は *pêche*, *[ˈpeʃi] は *péche*, *[ˈpeʃi] は *pâche*, [ˈpeʃi] は *peiche* など) を “*Eu digo a forma __ de novo.*” の下線部に埋め込み、§ 2 の予備調査に協力してもらったインフォーマントの 1 人である S1 に、彼女にとって自然なスピードとスタイルで読み上げてもらった。つぎに、そのデジタル録音から問題の音形の箇所のみを切り取って音声ファイルを作成した。予備調査時の残りのインフォーマントには、それらの音声ファイルが正書法的表記に合致しているか否かを確認してもらい、ほぼ全員の了承を得るまで音声ファイルを練り上げた。

§ 3-3. 聞き取りテストの実施

複数のポルトガル母語話者に、§ 3-2 の音声ファイルにそれらと同様に作成された他の音声ファイル (実験とは直接の関係がない) を混ぜたものを聞かせ、何らかの語として同定可能かどうかを回答してもらった。被験者はコインブラ大学文学部の *Língua e Cultura Japonesas I* (2002 年度開講) を受講していたポルトガル人学生であり、テストは 2002 年 10 月、12 月、2003 年 3 月の 3 回にわたって行われた。以下 § 4 は、その 3 回のテストすべてを被験した計 24 名のうち、コインブラ出身のコインブラ育ちか、もしくは言語形成期の途中でコインブラに移住して以来同市で生活し続けてきた被験者計 15 名のテスト結果である。

§ 4. 聞き取りテストの結果集計

下の (1) から (5) までの「左欄」は「被験者に与えられた刺激としての音形」であり、「中央欄」と「右

欄」はそれらに対応して「全被験者のうち、それらを同定可とした割合とその内訳」と「全被験者のうち、それらを同定不可とした割合とその内訳」である。

(1) 刺激形：*mexa* ['meʃe] / *mecha* ['meʃe] / *['meʃe] / *['meʃe] に対する反応

被験者に 与えられた 刺激形	同定可	Aのうち	Aのうち	Aのうち	同定不可	Bのうち
	とした 割合 (A)	<i>mexa</i> として 同定	<i>mecha</i> として 同定	その他として 同定	とした 割合 (B)	連想不可 とした割合
['meʃe]	93% (14/15)	100% (14/14)	0% (0/14)	0% (0/14)	7% (1/15)	0% (0/1)
[meʃe]	87% (13/15)	0% (0/13)	85% (11/13)	15% (2/13)	13% (2/15)	0% (0/2)
*['meʃe]	27% (4/15)	75% (3/4)	0% (0/4)	25% (1/4)	73% (11/15)	50% (5/11)
*[meʃe]	33% (5/15)	100% (5/5)	0% (0/5)	0% (0/5)	67% (10/15)	50% (5/10)

(2) 刺激形：*['meʃi] / *mexe* ['meʃi] / *['meʃi] / *['meʃi] に対する反応

被験者に 与えられた 刺激形	同定可	Aのうち	Aのうち	同定不可	Bのうち
	とした 割合 (A)	<i>mexe</i> として 同定	その他として 同定	とした 割合 (B)	連想不可 とした割合
*['meʃi]	7% (1/15)	100% (1/1)	0% (0/1)	93% (14/15)	14% (2/14)
[meʃi]	93% (14/15)	100% (14/14)	0% (0/14)	7% (1/15)	0% (0/1)
*[meʃi]	7% (1/15)	0% (0/1)	100% (1/1)	93% (14/15)	28% (4/14)
*[meʃi]	7% (1/15)	100% (1/1)	0% (0/1)	93% (14/15)	43% (6/14)

(3) 刺激形 *['deʃi] / *desce* ['deʃi] / *['deʃi] / *deixe* ['deʃi] に対する反応

被験者に 与えられた 刺激形	同定可	Aのうち	Aのうち	Aのうち	同定不可	Bのうち
	とした 割合 (A)	<i>desce</i> として 同定	<i>deixe</i> として 同定	その他として 同定	とした 割合 (B)	連想不可 とした割合
*['deʃi]	13% (2/15)	50% (1/2)	50% (1/2)	0% (0/2)	87% (13/15)	31% (4/13)
[deʃi]	87% (13/15)	100% (13/13)	0% (0/13)	0% (0/13)	13% (2/15)	0% (0/2)
*[deʃi]	26% (4/15)	25% (1/4)	75% (3/4)	0% (0/4)	73% (11/15)	18% (2/11)
[deʃi]	87% (13/15)	0% (0/13)	92% (12/13)	8% (1/13)	13% (2/15)	0% (0/2)

(4) 刺激形: *['peʃi] / *['peʃi] / *['peʃi] / peixe ['peʃi] に対する反応

被験者に 与えられた 刺激形	同定可	Aのうち	Aのうち	同定不可	Bのうち
	とした 割合 (A)	<u>peixe</u> として 同定	その他として 同定	とした 割合 (B)	<u>連想不可</u> とした割合
*['peʃi]	20% (3/15)	100% (3/3)	0% (0/3)	80% (12/15)	0% (0/12)
*['peʃi]	13% (2/15)	100% (2/2)	0% (0/2)	87% (13/15)	46% (6/13)
*['peʃi]	33% (5/15)	100% (5/5)	0% (0/5)	67% (10/15)	0% (0/10)
['peʃi]	100% (15/15)	100% (15/15)	0% (0/15)	0% (0/15)	0% (0/0)

(5) 刺激形: feche ['feʃi] ~ ['feʃi] ~ ['feʃi] ~ ['feʃi] / feixe ['feʃi] に対する反応

被験者に 与えられた 刺激形	同定可	Aのうち	Aのうち	Aのうち	同定不可	Bのうち
	とした 割合 (A)	<u>feche</u> として 同定	<u>feixe</u> として 同定	その他として 同定	とした 割合 (B)	<u>連想不可</u> とした割合
['feʃi]	74% (11/15)	91% (10/11)	9% (1/11)	0% (0/11)	26% (4/15)	0% (0/4)
['feʃi]	80% (12/15)	92% (11/12)	0% (0/12)	1% (1/12)	20% (3/15)	0% (0/3)
['feʃi]	87% (13/15)	90% (11/13)	5% (1/13)	5% (1/13)	13% (2/15)	50% (1/2)
['feʃi]	93% (14/15)	36% (5/14)	64% (9/14)	0% (0/14)	7% (1/15)	0% (0/1)

§ 5. 結果の解釈

§ 4の集計結果から得られる結論を初めに言えば「音的対立 [e]-[e], [e]-[e], [e]-[e], [e]-[e], [e]-[e], [e]-[e] のそれぞれには /j/ の前でも弁別的・同定的な機能が認められ、したがって /e/-/e/-/e/-/e/ は /j/ の前でも他の音コンテキストと同じように弁別に対立している」となる。これらの音的対立のそれぞれがそのような働きを有すると考えられる論拠は以下のとおりである。

§ 5-1. [e]-[e] について

mexa ['meʃe] を *mecha* として、あるいは逆に *mecha* ['meʃe] を *mexa* として認識した被験者は皆無であった (§ 4 (1))。したがって *mexa* と *mecha* は対立 /e/-/e/ によって弁別されていると考えざるを得ない (*mexa* /'meʃA/ - *mecha* /'meʃA/)。また *mexe* ['meʃi] と *desce* ['deʃi] の [e] を [e] で置換した *['meʃi] と ['deʃi] を実在する何らかの語として同定した被験者はその割合が非常に低く、それぞれ 1/15 と 2/15 に過ぎなかった (§ 4 (2)と(3))。これは次のように解釈可能である — *medo* ['meðu], *dedo* ['deðu] と *feche* ['feʃi] の存在により、音 [e] は音環境 ['m__ʃi], ['d__ʃi] でも発音可能であると考えられ、したがって ['m__ʃi] と ['d__ʃi] において [e] は [e] と同じく何らかの音素の実現に相当していることになる。ここでもし [e] と [e] が同一音素の

異音であるならば、[*meʃi*]と[*deʃi*]がそれぞれ *mexe*, *desce* と認識されるように、*[*meʃi*]と*[*deʃi*]もそれぞれ *mexe*, *desce* と認識されるはずである。だが、実験結果によるとそうではない。これは、コインブラ変種では *mexe* と *desce* の記号表現に [e] で実現される /e/ が割り当てられているのに対し、現時点において同変種にはその位置に /e/ [e] が割り当てられている語が存在していないからである。

§ 5-2. [e]-[ɐ] について

mexa [*meʃɐ*] の [e] を [ɐ] で置き換えた *[*meʃɐ*] (*manha* [*meɐɐ*] と *fecha* [*feʃɐ*] からこの音連続は発音可能と考えられる) を *mexa* として同定した被験者はその割合が 3/15 と低く (§ 4 (1)), しかもうち 2 名はこの音連続に奇妙さを感じていた。また *[*meʃɐ*] が何を意味するのか判らなかつた被験者 12 名のうち 5 名は、実在する他の形態を連想することすらできなかつた。これは、音声的対立 [e]-[ɐ] が弁別的対立 /e/-/ɐ/ の実現であり、現時点でのコインブラ変種には */*meʃA*/ (音声的実現は*[*meʃɐ*]) を記号表現とする語が存在しないからであると考えられる (§ 5-1 で行った議論を参照のこと)。

§ 5-3. [e]-[ej] について

mexa [*meʃɐ*] の [e] を [ej] で置き換えた *[*meʃej*] (*meia* [*meje*] と *fecha* [*fejɐ*] からこの音連続は発音可能と考えられる) を *mexa* として同定した被験者は、その割合が低くて 5/15 であった (§ 4 (1))。これもまた、音声的対立 [e]-[ej] が弁別的対立 /e/-/ej/ の実現であり、現時点でのコインブラ変種には */*meʃejA*/ (音声的実現は*[*meʃejɐ*]) を記号表現とする語が存在しないからであるからと考えられる (§ 5-1 を参照のこと)。

§ 5-4. [ɛ]-[ɐ] について

mexe [*meʃi*] と *desce* [*deʃi*] の [ɛ] を [ɐ] で置き換えた *[*meʃi*] と *[*deʃi*] を何らかの語として同定した被験者は、その割合が低くてそれぞれ 1/15 と 4/15 であった (§ 4 (2)と(3))。これは [ɛ] と [ɐ] が同一音素の異音ではないことを示していると考えられる。詳しく見ると*[*deʃi*] を何らかの語として同定した被験者の割合のほうが高いが、これは類似の音形 *deixe* [*dejɐ*] が存在するからであると思われ、実際 4 人中 3 人は *deixe* と同定していた。

§ 5-5. [ɛ]-[ej] について

desce [*deʃi*] を *deixe* として、あるいは逆に *deixe* [*dejɐ*] を *desce* として同定した被験者は皆無であった (§ 4 (3))。したがって *desce* と *deixe* は対立 /e/-/ej/ によって弁別・同定されていると考えざるを得ない (*desce* /*deʃɐ*/ - *deixe* /*dejɐ*/)。かつ *mexe* [*meʃi*] の [ɛ] を [ej] で置き換えた *[*meʃej*] を何らかの語として同定した被験者は、その割合が非常に低くて 1/15 であり (§ 4 (2)), 同定不可とした被験者の半数近くは *[*meʃej*] から何らかの語形を連想することすらできなかつた。これもまた [ɛ] と [ej] が同一音素の異音

であることを否定する証拠と考えられよう。

§ 5-6. [ɛ]-[ej] について

feixe ['feɪjɪ] から [j] を除いた ['feɪi] を聞いて *feixe* と同定したのは 13 人中わずか 1 人に過ぎず (§ 4 (5)), 残りの 12 人は 1 人を除いてすべて *feche* と同定している。これは [j] の有無が記号の弁別同定に関与していることを示しているといえよう。つまり [j] で実現される /j/ はやはり /ʃ/ の前でも音ゼロと対立することによって弁別同定機能を果たしており、この /j/ が *feixe* の形態である /'feɪjɪ/ に不可欠な構成要素であるがゆえに、/j/ の欠けた /'feɪ/ ['feɪi] が *feixe* と同定されえないのである。また *feche* の標準的実現形の 1 つである ['feɪi] を聞いて *feche* と同定した被験者はその率が非常に高く 13/15 であるのに対し (§ 4 (5)), *deixe* ['deɪjɪ] と *peixe* ['peɪjɪ] の [ɛ] から [j] を除いた *['deɪi] と *['peɪi] を何らかの語として同定した被験者の率はそれぞれ 4/15 と 5/15 で低かった (§ 4 (3)と(4))。これもまた、*deixe* /'deɪjɪ/ と *peixe* /'peɪjɪ/ においては /j/ がその記号表現を構成する要素として選択されている証左となろう。

§ 6. 終わりに

以上の調査結果とそれらに関する議論を要約すると次の (1)~(4) のようになろう。¹¹

- (1) 先行研究の見解とは異なり、少なくともコインブラ変種では /j/ の前でも /e/-/e/-/ɛ/-/ej/ が弁別的に対立していると考えられる。すなわち、この音コンテキストでも「舌の最高点の高低差（開口度）による対立 /e/-/e/」と「舌の最高点の前後差による対立 /e/-/ɛ/」そして「対立 /j/ - 音ゼロ」は中和しない。
- (2) ただし、他の音環境とは違って (1) の諸対立を示す最小対は少数であり、最小対の確認されない対立も存在する。
- (3) たとえば *fecho* のようなある種の語彙項目に関しては、話者によって /e e e ej/ のどれが割り当てられるのかが異なっており、また、同じ 1 つの話者であってもその時々によって例えば /e/ が用いられたり /ej/ が用いられたりするような「揺らぎ」の現象が観察される (cf. 日本語「行く」/iku~/juku/).
- (4) /e e e ej/ の語彙項目への配分は、それらの語源形や、動詞活用における母音交替などの形態論的事実を反映していると思われる。

最後に、今後の研究課題としては次のようなものが挙げられよう。

- (1) 調査範囲を /k j/ の前に位置する強勢開音節にも広げる。

筆者のこれまでの概略的な観察によると、たとえば、ある話者では、/j/ の前において、表記 *e/a* の対立に対応して [ej]-[ɛ] が規則的に対立しているのに対し、他の話者ではそうした表記の別に関わらず [ej]-[ɛ] が無差別に現れており、¹² それゆえ、/ʃ j/ の前とは弁別的対立の様相が異なっている可能性がある。

- (2) 語彙項目によって /e e e ej/ の割り当てに「話者間での不同」や「同一話者内での揺らぎ」が生じている

要因を通時的・共時的観点から探求する。

- ¹ コインブラ大学は1290年リスボンに創設されたヨーロッパ最古の大学のひとつであり、その数年後コインブラに移転したのち、両都市の間を何度か往復しながら、1537年最終的に後者に設置されることになる。1911年にリスボン大学が創立されるまでは国内唯一の総合大学であった。コインブラはその大学の文化的威信と、大学を通じて全国に及ぼしてきた影響によってポルトガル語の標準的規範の形成地となってきた。
- ² BARBOSA (1983) p.64; (1994-1) pp.110-111, pp.170-171, pp.175-176; (1994-2) pp.134-135 と MARÇALO (1995) pp.263-264, BARROSO (1999) pp.121-122, pp.193
- ³ /ʒ/ は正確には後部歯蓋子音もしくは歯茎硬口蓋子音で実現されるが、ポルトガル語学においては /ɲ/ と並んで伝統的に「硬口蓋子音」と呼ばれている。
- ⁴ 揺らぎ fluctuation: “utilisation facultative et semble-t-il aléatoire d’un phonème ou d’un autre pour un même monème” (WALTER (1982) p.34): たえば「声」[koe]と「恋」[koi]の記号表現は常に区別する(つまり /e/ と /i/ を弁別的に対立させている)一方で、「蠅」はその時々によって [hae] と発音したり [hai] と発音したりする(つまり「蠅」の記号表現に対してはその時々によって /e/ を割り当てたり /i/ を割り当てたりしている)ような話者のふるまいを指す用語である。
- ⁵ ACADEMIA DAS CIÊNCIAS DE LISBOA (2001), CUNHA (1986), PORTO EDITORA (2004), WILLIAMS (1961) を参考とした。
- ⁶ S1: 文学部学生 (F20), N: 理学部学生 (M20), A1: 経済学部学生 (M22), F1: 文学部学生 (M25), C: 文学部卒業・教員研修生 (F25), S2: 文学部卒業・博物館勤務公務員 (M27), A2: 法学部卒業・同学部講師 (M32), F2: 文学部卒業・同学部非常勤講師 (F35), A3: 文学部卒業・主婦・S1の母 (F45)。()内のM/Fは男女の別を指し、数字は調査時の年齢である。
- ⁷ 表に関して、lat. は「ラテン語」、fc. は「フランス語」、cast. は「カステイリーヤ語」、< は「音変化」、~ は「派生・形態論的類推」、□ は「借用」をそれぞれ意味する。
- ⁸ A3 (F45) は -sc-, -sq- を [-ʃs-] と実現していた。この -sc-, -sq- はかつて [-s-] と発音されていたが(ブラジルでは今日でもそうである)、綴り字の影響により、とくに教養階層において子音連続 [-ʃs-] で発音されるようになった (TEYSSIER (1980) p.81)。さらに今日では [j] が後続の [s] を同化して生じた単子音 [-ʃ] が、-sc-, -sq- の実現として、リスボン変種のみならずコインブラ変種でも一般化しつつあるようである(厳密な調査が必要であるが、少なくとも残りのインフォーマントはすべて [-ʃ] と発音していた)。
- ⁹ インフォーマント A1 (M22) は -x- を [-ʃ-] ではなく [-ks-] と実現していた。
- ¹⁰ ただし *deixe* [deʃi] や *peixe* [peʃi] のように、他の局地的方言では標準的に用いられている形もある。
- ¹¹ §1の終わりで述べたように、本論考では紙数の関係上、同様の結果が得られた /ʒ/ の前の強勢音節に関しては詳細な報告・論述を省略した。しかしながらここで /ʒ/ の前の強勢音節に関して述べられていることは /ʒ/ の前にもあてはまることを改めて注記しておく。
- ¹² かつて /ɲ/ の前では、e は [eɲ], a は [aɲ] に対応していたと考えられる (*lenho* [ˈleɲnu] - *lanho* [ˈleɲnu])。後に隣接異化によって [eɲ] > [ej] なる音変化が生じると (TEYSSIER (1980) pp.64-65), [j] の有無のみが対立を保障するようになった (*lenho* [ˈleɲnu] - *lanho* [ˈleɲnu])。FONSECA (1957) の音声表記にはこの言語状態が反映されている。後に、多くの話者では、-enh- [-eɲn-] から [-j-] が脱落して -anh- [-ɐn-] との区別が消失したもようである (LAROUSSE (1996) と ACADEMIA (2001) の音声表記にはこの言語状態が反映されている)。また、ある種の話者では [-j-] が非弁別的な随機的要素となっている可能性もある。

【参考文献】

- ACADEMIA DAS CIÊNCIAS DE LISBOA (2001), *Dicionário da Língua Portuguesa Contemporânea*. Lisboa, Verbo.
- BARBOSA, Jorge Morais (1983) — *Études de phonologie portugaise*. 2.ème éd. Évora, Universidade de Évora, Divisão de Línguas e Literatura.
- BARBOSA, Jorge Morais (1988) — “Notas sobre a pronúncia portuguesa nos últimos cem anos.” In: *Biblos LXIV*. Coimbra, Universidade de Coimbra, pp.329-382.
- BARBOSA, Jorge Morais (1994-1) — *Fonologia e Morfologia do Português*. Coimbra, Livraria Almedina, 1994-1.
- BARBOSA, Jorge Morais (1994-2) — “Portugiesisch: Phonetik und Phonemik.” In: *Lexikon der Romanistischen Linguistik*. Ed. HOLTUS, Günter, Michael METZELTIN & Christian SCHMITT. Vol. VI, 2, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, § 418, pp. 130-142.
- BARROSO, Henrique (1999) — *Forma e Substância da Expressão da Língua Portuguesa*. Coimbra, Livraria Almedina.
- CUNHA, Antônio Geraldo DA (1986) — *Dicionário Etimológico Nova Fronteira da Língua Portuguesa (2.ª ed. revista e acrescida de um Suplemento)*. — Rio de Janeiro, Nova Fronteira, 1986, xxx, 840, xx.
- FONSECA, Fernando Venâncio Peixoto DA (1957) — *Dicionário Português - Francês*. Paris, Larousse.
- LAROUSSE (1996) — *Larousse de Poche Dictionnaire Français - Portugais / Portugais - Francês*. Paris, Larousse.
- MARÇALO, Maria João (1995) — “A flutuação de fonemas em português: uma questão de morfologia?” In: *Actas do 10º Encontro da Associação Portuguesa de Linguística*. Lisboa, Edições Colibri, pp.255-368.
- PORTO EDITORA (2004) — *Dicionário Editora da Língua Portuguesa*. Porto, Porto Editora.
- TEYSSIER, PAUL (1980), *Histoire de la langue portugaise*. Paris, Presse Universitaire de France [Tradução portuguesa: Celso Cunha (1982), *História da Língua Portuguesa*. Lisboa, Livraria Sá da Costa Editora].
- WALTER, Henriette (1982) — *Enquête phonologique et variétés régionales du français*. Paris, PUF.
- WILLIAMS, Edwin Bucher (1961) — *Do Latim ao Português*. Rio de Janeiro, Tempo Brasileiro, 1961 (3ª ed. 1975).